

# 昔話の一考察

—女性の心の内的成長について—

小野 瑞江

## I はじめに

昔話は長い年月をかけて祖先に語りつがれてきたものであり、時代を越えて存在し続けてきた貴重な心の民族遺産といえる。フォン・フランツによると、この昔話は「普遍的無意識的な心的過程の最も純粹で簡明な表現」であり、「それは元型をその最も単純で明らかさまな、かつ簡潔な形で示して」といふとされる。しかもその「元型的イメージは、普遍的な心に生じている過程を理解する最善の手がかりをわれわれに提供する」。従つて昔話において主人公が様々な困難と出会い、それを克服していく過程は、現実の人生で私たちが出会う様々な問題解決のための方法を暗示し、時には最善の手がかりをも提供してくれるといえる。

さて本稿では、昔話に語られる結婚における「女性の心の内的成長について」主題とした。主題化の理由の第一は、次のような素朴な疑問にあつた。昔話の中で結婚が語られるばあい、主人公が様々な困難と出会い、最後には王子さまあるいは王女さまと目出たく結婚して終わ

るという形式をとる。そこでは結婚は、到達点としての幸福を象徴的に意味する。しかし二人が会って互いに相手を発見することは、結婚以前同様それ以後も繰り返されるのではないか。

そうであるとしたら、昔話において結婚後も繰り返される相互の再発見（本稿ではそれを男性と女性の変化、成長ととらえた）をこそ考究したい。それが第二の理由となる。結婚について、ユング派分析家のひとりである A・グッゲンビュール・クレイグは「至福（Well-being : 幸福）への道ではなく、個性化に至る一つの道程である」と述べる。個性化への道は「結婚」という様態以外にも様々にありうるが、特に結婚における「男性対女性」という対極性の文脈」の中で、双方の意志と努力によってより多く実現される。しかも結婚するという行為によって男性と女性は、「お互に對決するという仕事を引受け」、伴侣と添い遂げるという苦しみや喜びを通して、お互いに個性化を実現するという。従つて結婚自体が目標となつて目出たく終わるのでなく、むしろこの時

点から男性と女性の双方にとって、より熾烈な個性化への不斷の努力が開始されるのであり、本稿はその進行過程を分析することにある。

第三の理由は、現在活発に展開されてきている様々な女性学研究にかかわる。本稿で主題とした「結婚」に関する研究に限つていえば、女性史的立場からは、結婚の形態およびその歴史的展開から男女関係の変遷を跡づける試みがある。又、文化人類学、民俗学では、結婚につわる儀礼や習俗を堀り起こし、その象徴論的考察と分析がなされる。そして女性論的アプローチでは、上述の諸研究を土台として女性の地位や権利、人権にかかわる諸条件の考究を通して女性の解放を主題化しようとしている。これらの研究は主に、結婚の史的解明から、それを支える外的な諸条件、あるいはその意味、価値などにかかわるものである。

ところが「結婚」とは、一対の主体によつて「生きられる生の過程」に他ならない。そうであれば、主体自身によつて、その生きられる「過程」「意味」「価値」が問い合わせ返

されることこそ重要な課題となるであろう。しかもそれは外的に表出され、言語化されうる意識領域のみにとどまらず、言語化されにくい無意識の深層に至る領域にまで及んで、はじめて全貌が明らかとなるのではないか。

本稿は以上の動機により昔話の中に象徴的に表された女性の心の内的成長について、特に心の内的成熟過程に注目したユングの分析心理学的手法を用いて考察した。

## II 先行研究との関連

昔話のユング心理学的研究については、フォンフランツの名著「おとぎ話の心理学」ならびに「メルヘンと女性心理」などがあり、これらの著作によって昔話の分析心理学的解釈、さらには昔話に語られた女性の本質について知ることができる。

日本の昔話を分析したものとして、河合隼雄の「昔話と日本人の心」がある。河合は、日本の昔話に表されたと特に関連する先行研究、エリック・ノイマンの「アモールとブシケー」、河合隼雄の「昔話と日本人の心」、玉谷直美の「女性の心の成熟」に限って述べたい。

さてユング派の分析家であるエリック・ノイマンの「アモールとブシケー」は、ギリシャ神話のブシケが歩んだ自己実現（個性化）の過程を分析心理学的に解釈したものである。ノイマンは「ブシケの物語は、苦しみを通して発達を遂げるという、女性の宿命に入るイニシエーションである」と述べる。つまりブシケが歩んだ苦難の道は、無意識の楽園から童とのたたかいを経て課題をなしとげることにあり、地下界への旅を貴重な宝物の獲得から聖なる結婚、女神としての再生、子どもの誕生に至る。これらはまさに女性の自己実現の過程ではあるが、極めて西洋的なそれでもある。本稿でその差異にまで及ぶことはできないが、女性の男性機能統合の過程について、ノイマンの解釈から多くの示唆を得た。

男性像によつて提示したことに対し、河合は日本人の自我を女性像で示す方が適切とする。その女性像は、はかなく消え去る女性から意志する女性まで、自我の発達にそつてやや継続的、発達的に記載されている。しかし同時に、それらが心の全体性の方向にそつて自由自在に姿をかえうる女性像としても分析されている。この著は女性自身の心の成長をみごとに語つたものではあるが、総じて日本人的自我のあり方に焦点があつてられている。

本稿では同じく女性の心の内的成長を考察するものであるが、「結婚」において特に課題となる男性機能の統合に焦点があつてられる。これは玉谷直美が「女性の心の成熟」で述べる第三段階に相当するものである。玉谷直実のいう「女性の成熟」の各段階を以下に概略したい。

第一段階は成女式といふ内的イニシエーションを経て母から分離し、娘に変身する時期。第二段階は「死の結婚」を経て母親性を生きる時期。そこでは忘我性、身体性、大地性といふ主に身体レベルの成熟が課題となる。

第三段階は自我の確立へと向かう時期。ここでは男性的

意識の統合を課題とする。第四段階は自我の死の達成である。これら四つの段階は、発達的と同時に「一つの位相」としてとらえうると玉谷はいう。

ところで本稿は、玉谷のいう「第三段階」の男性機能の統合について、特に日本の昔話に語られた女性のいくつかの態度とかかわつて考察するものである。

### III 本論

さて女性の心が内的な成長をとげていくには、男性機



能とのかかわりが重要となることが玉谷によつて既述された。本論文ではこのかかわりにおいて大きな役割を果たす女性の態度を、以下の三つの特性においてみた。すなわち献身、耐えること、積極的な受動である。これらは近代、特に女性解放論的立場の研究が主流を占めねばならなかつた時期には、極めて消極的な女性の生き方として、どちらかといえば評価しがたい特性でさえあつた。しかし昔話を通してそれらを分析的にとらえた時、消極的とされていた特性が、むしろ女性の心の内的な成長にとつては、極めて深い意味を持つものであると推察される。以下にそれらの特性を語るにふさわしい昔話の代表例をそれぞれあげて考察したい。

### 1 献身の女性・「鶴女房」

へあらすじ▽男がわなにかかつて苦しんでいた鶴を（金を払つて）助けてやる。その翌晩、立派な女が男の家にやつてきて泊まり、男のおかた（妻）にして欲しいと頼む。男は食物も充分にない貧乏生活なので、「このように立派なあんたを、おかた

になぞできない」と断わる。しかし女に是非にと乞われ、男は女房にする。女房となつた女は、翌日から戸棚の中へ入り機を織るが、決して戸を開けて見てはいけないという。女の織つた反物は高く売れ、男は「もう一反」と要求する。女は、のぞかないよう固く約束して、再度戸棚に入る。ところが男はがまんできず、とうとう約束を破つてのぞいてしまう。戸棚の中では裸の鶴が羽根を抜いて反物を織つていた。反物を織りあげて出てきた女は、男に別れを告げ、いすこへと飛び去つた。男が別れた女（鶴）に会いたくて尋ねていくと、裸の鶴は王様であった。男はそこでしばらくご馳走になり帰つてきたという。

### ——鹿児島薩摩郡

鶴女房は日本昔話大成<sup>2</sup>において、婚姻、異類女房譚に分類されている。しかしそこで語られている鶴女房の類話では、鶴の恩返しが主題となり結婚に至らないもの、あるいは結婚の語られていないものが71話中31話もある。これらの類話について河合隼雄は、仏教説話好みの報恩譚へ変化したものではあるが、あくまでも鶴との婚姻が大切なテーマであったとする。昔話「鶴女房」を

再話した木下順二（「夕鶴」金の星社刊）、神沢利子（「つるにょうぼう」ボプラ社刊）も、それぞれのテーマを「鶴の愛とおろかな悲しい男」、「愛の物語」におき、結婚における男女の関係を物語っている。本稿でも「鶴女房」

は、日本昔話大成2に従って、異類婚姻譚として考察するものである。

さて女（鶴）は、助けてもらつたお礼に男の女房になり、持つてきたお金で米や肴を買い、よく家の世話をした（愛媛県川之江市）。又馳走をつくり正月も立派にしたという（鹿児島県大島郡奄美大島）。さらに女は自らすすんで戸棚の中へ入つて反物を織つた。このように女性としての仕事をすすんとするばかりでなく、女は機織りが好きでさえある（新潟県北魚沼郡）。しかも上手に立派な布を織りあげることもできる（新潟県佐渡郡）。冒頭に掲げた「鶴女房」では、女は三日ばかり戸棚の中へ入つていて四日目に出てきて、「苦しかつたろう。早うご膳を食べててくれ」といわれると、「はい」といってご膳を食べましたという。機織りの間、食事もとらず一心不乱

に仕事をしたにちがいないが、疲れを口にすることもなく、こともなげで素直な反応である。機織りには一週間（鹿児島県鹿児島市）、または三年もかかつたと語られる（宮城県遠野市）。

機織りの度に女はやせ細つていった（福島県いわき市）。はつきり鶴が自分の身体の毛を抜いて機織りをしていると語られ（新潟県見附市、同佐渡郡、岡山県真庭郡、長野県下水内郡）、機織りのため精魂つきて赤裸の鳥になつたともいう（岩手県遠野市）。命がけで織つた（福井県坂井郡）のである。どの類話も身を削る思いで機を織り、実際に身を削つてさえいた女の姿が浮きぱりとなる。このように自分の羽根をむしってまで織りあげられた反物は、予想にたがわざ高い値段で殿様に買いとられ、男と女はたちまち大金持ちになつた。ところが金持ちになると、男は働くなくなつた（岡山県真庭郡）。それどころか欲が出てもつとお金が欲しくなり、もう一反織らせるとある（新潟県両津市）。

いっぽう男はどのように語られているだろうか。多く

の類話に共通する男の像は、第一に貧乏息子であったといふ。「炭焼き」という職業で語られているばあいもある（鹿児島県薩摩郡）。「炭焼き」は昔話「炭焼長者」の説明によると、世の中のほんとうのナララン者とイコールであり、どん底の貧乏を意味した。正月を迎えるのにふとんもない暮らし（鹿児島県薩摩郡）、あるいはその日の食べるお米もない状態である（愛媛県上浮穴郡、福岡県企救郡）。その他親孝行息子（長野県南安曇郡、鹿児島県大島郡）、正直者（長野県下伊那郡、同北安曇郡）、なまけ者（山梨県西八代郡）、馬鹿息子（新潟県佐渡郡）などと語られる。貧乏かつそれらのプラス・マイナスの諸特性を重ね持つた男ととらえることができる。

このようなどん底の貧乏生活にも拘らず、男は傷ついた鶴を見殺しにできず、全財産を投じて鶴を助けた。これが第二の特徴、慈悲深くやさしい男の姿となる。しかも男は傷ついた鶴の介抱だけでなく、女房となつた女に対しても極めてやさしい心づかいを示す。たとえば、機織りをすませて戸棚から出てきた女に「苦しかつたら

う。心配だつたよ。早うご膳を食べててくれ」と思いいやる。第三に男は、もう一つの世界（無意識または自然）とも親しい関係を持てる存在であつた。それは鶴の住む世界であり、男は自然的なものに向かってより開かれていたともいえよう。

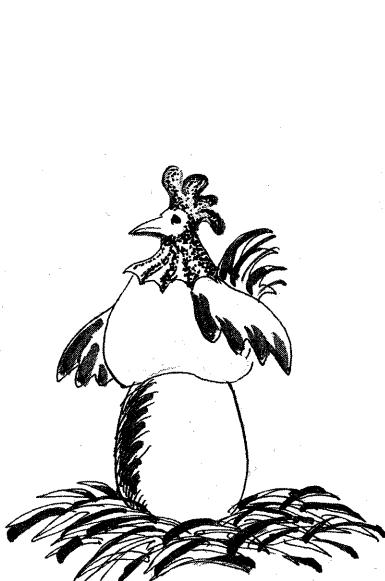
女は献身という女性特有の仕事を通して、このような男のすべてを受容した。もともと女が男の女房になつたのは、傷ついた身を助けてくれた男の恩に酬ることにあつた。一方内的には献身という仕事を通して、自己の中の母性を育てる仕事をなしつつあつたともいえる。それは、いざれは女性の心の中にある男性機能を統合していく際に大きな役割を果たすものである。玉谷直美は両者の関係について、男性機能の統合に先立つて母性という大きな器が育つていないと、「女性が批判力を身につけだしたとき、自分自身の女性性を切りきざむ恐れが出て来ます。そしてそれは男性を去勢する方向へと動きはじめます」と述べている。

さてお金ができるまでは、現実の男も女の献身によく

応えることができた。ところがお金ができ、欲深くなつた人間は不安も高くなる。不安の高い人間は、約束を守つてじつと待つことができなくなるにちがいない。当然男は女房である鶴の住む世界から遠ざかり、だんだん別世界の人間、濁った現実の世界の人間になりつつあつたにちがいない。とうとう男は女との固い約束を破つて戸棚の中をのぞき、裸の鶴を見てしまふ。

女は男に真の姿をみられ、泣き泣きいすこへか飛び去る（山形県最上郡）。また精魂つきて赤裸の鳥になつて去る（岩手県遠野市）、遂には首をつって（広島県比婆郡）、赤裸で死んでいる（埼玉県川越市）と語られる。女は自分の眞の姿を見られると同時に男の変わり果てた姿をも見たといえよう。相手の眞の姿が見えてくるということは、自分の眞の姿に気づいていくことでもある。

それはまさに死に至る程の衝撃であった。プシケの神話において、プシケが一人の姉にそそのかされて、灯をかけて夫の正体を見た時の衝撃も、実にそのようなものであつたにちがいない。ノイマンはそれを「プシケーが本



来のプシケーに立ちかえるような覚醒であり、これこそまさに女性の人生における決定的瞬間である」と述べる。プシケーが暗闇の楽園にて母性のみに生き、夫の正体を見ないですんだなり、そのまゝ幸せな人生を送ることができたであろう。しかし一度目覚め、意識の灯をかかげてしまった女性は、苦難の道を歩まねばならない。遂に男と女の別れの時がやつてきたのである。女が身を滅ぼす程の献身をもつて育ててきた母性もそのまゝ、女は傷ついて姿を消さざるをえなかつた。女が男性機能を心の中に位置づけるには、まだ時を待たねばならない。

## 2 再び耐える女性 .. 「天人女房」

へあらすじ／みけらんという若者が、水浴びしている天女の羽衣（飛びぎぬ）を手に入れる。男は天女の「どうか返して下さい」の頼みに応じず、家へつれ帰って結婚する。やがて三人の子どもが生まれる。ところが女はある日、長い間さがしていた自分の隠された飛びぎぬをみつけ、天に帰ってしまう。男は女に残したかきつけ通り、下駄千足、草履千足を地に埋め、それにきん竹を植え天女の後を追う。天に着いた男は、天女の父神から三つの難題を出され、天女の助けをかりて次々とやり遂げていく。ところが最後の難題をやり遂げた後、気を許して大水に流されてしまう。その結果男は犬飼星に、天女は織女星になり、彼らは年に一度、七月七日に逢うことができるのみであるという。——鹿児島県大島郡

天人女房における男と女の結婚は、男が女の羽衣を一方的に隠して家へつれ帰ったところから生じた。長野県上伊那郡の類話では、男が水浴びしている天女の羽衣を隠し、ひとり天に帰れないで困っている女を、「欺いて連れ帰る」と語られる。

男が女の着物（羽衣）をとりあげて隠してしまうとは、どのようなことを意味するのだろうか。衣服は外界から裸身を守るという役割を果たす以外に、人間が外界と調和していく為に外界に向けて見せる仮面でもある。コングはこの仮面をペルソナと呼び、夢の中では一般に「衣服」など、自分の身につけているもので表されていることが多いとする。天の女はペルソナとしての飛び衣（ぎぬ）を男にむりやりとりあげられてしまい、もう生まれ故郷である天へ戻れなくなってしまったのである。

その意味することは、娘からひとりの男の妻として、そしてやがては生まれる子どもの母親として新しいペルソナを身につけることを要請されたととらえることもできる。家庭生活の様々なことがらは、女性に対して自我放棄を要求することがらで満ち満ちている。その時女性は、心の中に様々な矛盾をかかえたまゝ、耐えるという行為によってその難事を克服しようとする。玉谷直美はその内的な意味を次のように分析する。つまり女性は、家庭生活において娘時代につちかってきた自我を放棄し

て（娘の死）、そのことを通して新たに実りある母へと成熟し、新たなペルソナを身につけることになる。「新たに自我を確立する以前に、女性はどうしても『耐える』という仕事をしておかねばならない」のである。

しかし今迄ちかってきた自我を放棄することは容易ではない。天の女は男との生活に耐えながら、一方でたえずもとの天へ戻ることを願っていた。七年目、遂にとの飛び衣をさがしあて、女は天なる国へ戻ってしまった。その時女は、完全に姿を隠して男との関係を永久に絶つことはしなかった。夫への書き置きを残して天へ昇つたのである。

母性の発展にとって、自我を放棄して歩む「受容」のプロセスは、一直線の方向で一挙に進むのではなく、行きつ戻りつしながら、ゲゼルが述べた発達の方向と同様、らせん状に展開しつつ深まっていくようである。しかも母性の発展においては、ある段階から次の段階への深まりに際して、必ず精神的な葛藤を伴うため、全人格を賭けて達成することになる。その結果達成された一方

の発展は、もう一方にもそれに対応する変化をひき起さずにはおかしい。その意味で「天人女房」では、次に男の変容が語られていると考えられる。

さて女が天に戻ってはじめて、努力と辛抱を要する男の変容過程が語られる。女の残した書き置きは、「下駄を千足と草履千足集めて地の中に埋め、その上にkins竹を植えると、二～三年後に天まで届く」というものであった。女が天へ戻る時子どもをつれていく類話もあるが（香川県仲多度郡、広島県佐伯郡、岐阜県吉城郡、新潟県長岡市、埼玉県所沢市）、数は少なく、大多数は三人の子どもが残される。男にとって妻のいない子どもづれの生活は、大変な努力と忍耐が要る日々となつたであろう。

やっと竹が伸び、男は女のいる天国へ登つた。天国には女の後に父神が控えていて、三つの難題が出される。その第一は、千町歩の山を一日で伐り拓き、第二に、そこへ一日で唐爪の種を蒔き、第三は、一日でそれをとり入れることであった。男性機能の特性が、その鋭い切断の能力にあるとすれば、山を伐り拓いたり、木を伐つて

焼き払うこと（高知県高岡郡）は、まさに男の仕事である。さらに第二、第三の種子を拾い、種を蒔き、とり入れることも、分類し方向づけ秩序を与える作業として、男性機能のもつ特性といえる。一方女性機能は、どちらかといえばすべてのものを包含し、他人を調和することが主となる。従って女性機能にとって分析し、秩序を与えたることは苦手なのである。さて男は天女の力を借り、父神に課された難題に向かった。

ところで「天人女房」は、男が努力して変容の過程を歩む話として分析してきた。しかし視点をかえ、女の側からながめると、異なって見えてくる。つまり女（天女）の心の中の男性像が活躍する姿と読み解くと、天においても女は、男性機能統合の仕事をなしとげるべく働いたといえる。玉谷直美は前述の著書で、すべてを包含する入れ物としての女性性に、秩序と方向性を与えることを男性機能統合の第一段階と述べる。ブンケーに与えられた「穀物の分類」同様、天の女は今それをやり遂げつづある。これは大変な難題であった。何故なら、山を

伐り拓き、耕し、種を蒔き、とり入れる仕事は、最低でも一年は要する。それをわずか三日で達成せねばならなかつたのである。しかも既述のように、女性機能にとつて苦手な仕事でもあった。

ところがもう一步の所で男性機能の反逆に出会つて、今迄の努力が水に流されてしまう。男性機能は、いつまでも素直であるとは限らない。その統合は、ひとすじ繩ではないかようである。

とうとう女は、いまだ男性機能を自己の中に確かに位置づけることができず、夫（男性機能）と別れることになる。とはいえ男性機能統合への道は完全に絶たれたのではなく、一年に一回はあるが、男とめぐりあえるといふかすかな可能性の中で、統合への道が残されたのである。

——つづく——

（福山短期大学）